中学校における取材指導

――三年生のばあい――

奥本昭三

Ⅰ はじめに
――この報告のねらい――
Ⅱ 取材指導の意義
Ⅲ 取材指導の経過
Ⅳ 取材指導の方法と反省
1 題材一覧表
2 話し合い
3 独話
4 掲示
Ⅴ おわりに

Ⅰ はじめに

いままで、日々の学習において、学習を終えてからノートにその時間に学習したことがらについての疑問や感想あるいは反省を短い文章に書いて記録すること、また必要に応じて学習材料としての文章を読んでは感想文を書き、とくに物語、小説などのばあいには作中人物に手紙を書いたりして、国語学習のなかでできるだけ多くの機会と場をとらえて、短い文章を書くことに慣れさせようとしてきた。

こうしたなかで、まとまった作品を書かせてみると、ほんのおざなりに、自己の身辺的な事がらを申し訳ていどに書きつけて満足するといった傾向の生徒が多いことに気づかせられる。さらに、書くことがないと訴える生徒もかなり多くみられるといった状態である。身辺雑記的な作文も、ある観点からの段階づけの評価はできるが、しかし、できあがった作品をいくらつついても効果は少なく、それよりも書くに値するものを発見させていくということ、つまり書かせるための書く前の指導が極めて重要であるという反省が浮かびあがってきた。このようなことから「作文メモ」の形式を大村はま先生から学び、作品を書かせるということ以上に「作文メモ」による取材活動をだいじにしていこうとしたわけである。

ところが、取材させておけばそれでよいという固定観念に捉われてしまった。生徒に取材活動をさせる。集まったものを題材一覧表としてプリントにする。生徒に配布して刺激を与え、さらに取材活動を続けさせるということで作文指導をしているのだという安易な自

己満足に陥り、惰性に溺れてしまっているという反省を持った。

ここで三年生一学期の取材指導のありのまゝをふりかえって、その問題点をつかみ、これからの自分の作文指導を力強いものにしていきたいと思う。

Ⅱ　取材指導の意義

今までの実践から考えられる取材指導の意義についてとりあげておく。

作文学習において、指導あるいは評価の観点として「書く前」「書く過程」「書いたあと」の三つが考えられる。取材指導は「書く前の指導」として重要な意義を持つ。つまり、書くことに対する意欲を高め、充実した作品を生みだすことができる。平素から取材活動を継続させ、題材への目を広げるようにして作品にむかわせることが可能となる。

この取材活動の中心は「作文メモ」による作業である。この作業は次にあげるようなことがらを含むものと考えられる。

(1)　書くことの障害のひとつを除き、書く意欲を高めることができる。

とくに生活文のばあい、何を書くかに困るものが多い。作文の嫌いな理由の第一にあがることがらである。平素書きたいと思うもの、興味のあることがらや内容を集めておくことは、書こうとする意欲を高め、作品を生む土台を築くものとなる。

(2)　充実した作品を生みだすことができる。

身辺的な題材をとらえることからさらに取材を重ねて題材への目を広げ、社会的なもの、思索的なものへと取材の目を向けさせていくことも継続的な取材活動の中で可能ではないかと考えられる。

(3)　構想をもって書くことの意識を高め、習慣づけていくことができる。

書かれた文章に中心がない、あるいは集中が足りぬ。断片的な思いつきを述べることに傾きやすいなどの欠陥をできるだけ除去し、いかなる文章を書く時も、まず構想を立てる習慣を重ねて、身につけさせるために「作文メモ」の中のひとつの項目を利用することができる。

(4)　作文活動の時間と機会を広げることができる。

課題として取材させるばあいも、自由に取材活動をさせるばあいも、「作文メモ」の利用によって比較的手軽に記録することができる。原稿用紙に向かわなければ作文ではないという考えでなく、書きたいと思う内容や、その題、構想を考えることなども十分価値のある作文活動であるという考えにたつわけである。日常の学習における書くことの活動以外に、このような取材の機会を与えること、取材への刺戟を与えて継続発展させていくことは、作文学習の機会と時間を広げることになると考えられる。

(5)　書くことの評価に役立てることができる。

「作文メモ」によって、取材させたものの中から作文がひとつの作品として生まれるとき、そのメモは当然作品をみていくときのひとつの評価の観点を示していることになる。また作品として成立させること以外に、どれだけ書くことに関心をもち、書こうという姿勢で、書く内容の広がりや深まりをみせつつあるかということも「作文メモ」による取材活動によって明らかにできるわけである。

Ⅲ・取材指導の経過

今までの取材指導の概略についてのべる。

1．33年度～36年度までのこと

(1) 33年度（一年生のばあい）六月、作文についての簡単な調査をした。書くことの困難点をあげてみると

① 書こうとすることが浮かんでこない。
② 題をどうつけてよいかわからない。
③ 初めのことばが浮かんでこない。
④ 頭の中に浮かんでいるのだが、ことばとして表現できない。
⑤ 初めは書けるが、書いていくうちにわからなくなる。
⑥ 字がきたない。漢字をよく知っていない。
⑦ 最後まで書いて、初めから読みかえすとおかしいところがある。

などがあがった。これらの困難点を少しでも除くために、「作文メモ」を使用し、取材活動をさせた。一学期末からはじめ、夏休みの課題、書くことの単元、冬休みの課題などに主として取材活動をとりあげた。

(2) 34年度（二年のばあい）一学期中間テストの処理のあとの時間を利用して「作文メモ」の目的やその項目を説明して、記入をさせた。これを第一回として、一学期一回ていどの取材活動にとどまった。

(3) 35年度（三年生のばあい）一学期半ばのテスト処理のあと、「作文メモ」を配布して記入させた。一学期に二回ていど、夏休みの課題として、二学期の書くことの単元で作文メモをとらせた。

(4) 36年度（一年生のばあい）一学期のはじめに「作文メモ」の説明をして課題作業にした。さらに一学期中四回、夏休み、二学期に二回、冬休み、三学期に一回とりあげている。

2 37年度（三年生のばあい）について

(1) 四月―学期初めの時間に、三年生としての国語学習の努力点を話し、「ノートの使用上の注意」や「ことばの採集」の説明のほかに次に示すような「作文メモ」用紙を与えて、項目を説明し、自由に取材するよう課題にした。

3年　　組	番

作文メモ	月　日	氏名
1．こんなことを書きたい。（できるだけくわしく。）		
2 題		
3 形		
4 構想（組み立て）をかじょう書きにする。 次の（　）つの段落で書き、中心（とくに力をいれたいところ）は○印のところである。		

5 書きはじめの一センテンスを書く。

（西洋紙四分の一大）

これによって集まった題材を並べて「題材一覧表」としてプリントにし、生徒に配布した。さらに、第二回目の「作文メモ」のために、それぞれの項目について具体例をあげてその書きかたを説明した。

「作文メモ」の具体例

1　こんなことを書きたい。

この物語を読み終えたのは、冬休みも終わりに近い日でした。初めは何の目的もなく読んだのですが、読み終えてからは、読まなければよかったと思うほど残酷なものでした。私は今でもこの物語が真実だと思いたくありません。この私の考えを感想文に書きたいと思います。

〔こんなことが書きたいという項目にふさわしく、くわしく書かれている。〕

2題　「アンネの日記」を読んで

2形　感想文

4構想

○この日記の作者はだれか。

○アンネとその一家の生活について。

○全体のあらすじ。（簡単に）

○アンネ達一家がユダヤ人であるという、それだけの理由でドイツを追われたことについての自分の考え。

◎物語全体からどういうことがいえるのか、また私達はどうすればよいのか。（最後のまとめ）

〔1・2・3・4・5・ここは「かじょう書き」と注意してある。〕

5書きはじめ

この物語は、アンネというユダヤ人の一少女が書いた日記から成り立っています。

1こんなことを書きたい。

自分の身内に「がん」の人はいないのになぜ「がん」の事を書いたのか。それは「がん」という病気が、外国に比べて日本に非常に多いということ。

2題　「がん」について

3形　「がん」という病気をなくそう。

〔この文は1の中に含めて書いておく。「形」のところは「作文」あるいは「研究」というようにする。〕

4構想

1・死者のうち「がん・」で死ぬる人は全体の50%。

2　なぜ「がん」になるのか。

3　ちりょう法を早く。

4自分の身内に「がん」の人はいないのになぜ「がん」の

事を書くのか。
〔どこに中心をおくのか○印をしておく。4ははじめにもってきたらどうか。〕

5書きはじめ
死者のうち「がん」で死ぬる人は全体の50%もの人だと、ある雑誌で読んだことがある。

（〔〕内は具体例をプリントにしたとき書き加えておいたものである。）

(2) 五月―「作文メモ」四枚を渡して、意見や考えがはっきり出せるようなものを題材として選ぶように注意して課題とした。集めたものは題材一覧表としてプリントにし、生徒に配布して参考にさせた。

(3) 六月―「作文メモ」四枚を与えていた。そのうちAは家族に読んでもらいたいもの、Bはクラスのものに読んでほしいもの、Cは学校全体の生徒に読んでもらいたいもの、Dは全国の中学生に読んでもらいたいものという指定をして、それぞれについて取材をさせた。集まったものは題材一覧表としてプリントにした。後に「討議」の学習のところで、「良い題材とはどんなものか。」というテーマでグループ討議をさせた時の資料とした。

(4) 七月―新聞記事や雑誌の文章などからヒントを得て、おもしろい内容とおもわれるものを紹介し、題材のいくつかをとりあげて話した。その後作文メモ四枚を与えて自由に取材させた。これらの作文メモをもとに、二クラスだけ（五クラス中）作品化させた。

以上取材活動の経過のあらましである。

Ⅳ 取材指導の方法と反省

1 題材一覧表について

作文題材一覧表37・4①

1 しょうぎ
② 自由
③ 二年の反省
④ 掲載紙
5 魚つり
6 書きたくない
⑦ 「バスツール」の感想
⑧ 三年生になって
9 おやじ
⑩ 先生について
⑪ 勉強
18 ベスの子
⑲ 仲間
⑳ 奥本先生
㉑ 三年生になってやりたいこと
22 ゆめの島
23 おばあさん
㉔ ぼくのミイラの二千年後
㉕ 交通事故
㉖ 私の友達
㉗ 私の兄
㉘ 三年になりたくない
㉞ 私の決心
35 盲腸の手術
36 花
㊲ 最高学年とは
38 アルバイトの思い出
39 別にどんなこともない
40 ゆうゆうなこの頃
41 姉妹
42 いなかのテレビ
43 三年生になっての先生
44 私が考えていた三年生

右の例は作文題材表の一部であるが、第一回の作文メモの提出状況や記入状況が思わしくなく、記入のしかたが徹底していないことが知られた。自由に並べた題材一覧表に、①すばらしいと思う題材はどれか②自分の意見や考えがはっきり出せる題材はどれかの二つの観点を示し、各自で読んで印をつけさせ、また「作文メモ」の具体

例もプリントによって示し、記入のしかたを項目ごとに説明していった。

題材一覧表は、自分たちの身辺からどういう題材が発見できるのか、友だちはどのような取材をしているのかなどを知らせるためのものである。これらのプリントによって取材活動への意欲を高め、また友人の取材に触発されて自己の取材への広がりや深まりを期待しようとするものである。

七月に取材したものについて、不完全ではあるが㋐自然㋑自己㋒友人㋓家庭㋔学習㋕楽しみ㋖読書㋗学級㋘学校㋙社会㋚世界㋛想像などに題材を分類してプリントした以外は、ただ集められたものを類別せず、そのままにプリントしたので同じ題材や似通った題材が種々雑多に交りあっている。これらは、あらかじめ分類規準をたてておき、それに従っておおまかに分類したうえで一覧表としてプリントし、取材傾向のおおよそが眺められるように、利用しやすいものにして生徒の手にわたるようにしなければならなかったと思う。

この題材一覧表をもとにして、話し合いをしたのは一回のみで、しかもそれは取材の目をひろげるという目的ではなく「討議学習」のひとつの材料として利用したに過ぎない。話し合うことによって、自分の取材分野を広げるような刺戟を受けあうことができればいっそうよいのであるが、時間の制約もありプリントを資料として流すだけに終わることが殆どといっていいくらいである。そのばあい題材一覧表を読む観点を具体的に示してやり読むことによってできるだけ多くのことに気づきうるようにしておくことが是非とも必要だと思う。

また、題材一覧表を読むことを課題とするばあい、設問とその記入の欄を設けて、切り取り線によって解答記入の用紙を提出させるようにしておくことも考えられる。

良い題材の具体例の一・二をプリントのはじめに掲げておいたり、また書き出しの一センテスを題材とともにプリントするなどのことも試みていきたいことである。

七月の題材一覧表の一例をあげておく。

作文題材一覧表　昭和36・7①

1「読んでみたい」と思う題材に○をしない
2「書いてみたい」と思う題材に◎をしなさい。

㋐自然（動物・事物）

1 雨もり
2 星
3 雷がいちばんこわいわけ
4 梅雨
5 雨（2）
6 まずしい夕やけ
7 太陽
8 夜
9 花びんの花
10 外のけしき
11 小鳥と花
12 山のわらび
13 海
14 水
15 やもり
16 ハエをとる猫
17 犬
18 くも
19 えんぴつ
20 かさ
21 ぬれた革グツ
22 かみの毛
23 車
24 色

㋑自己

1 心とは
2 自分とは
3 自分
4 私の手
5 私
6 花になりたくない
7 自分に自信を持て
8 私の夢

㋒友人

1 親友（2）

2 友達（2）
3 真の友
Ⓓ 家庭
1 弟
2 私の弟
3 妹のまりつき
4 母
5 父
6 父母
7 おばあちゃん
8 三人のいとこ
9 むだなことば
10 私の家のまわり
11 父の兄弟と母の兄弟
Ⓔ 学習
1 テレビと勉強
2 「ニガテ」のことばについて
3 勉強と社会
4 勉強のしかた について
5 勉強

6 作文メモ（2）
7 作文メモはきらい
8 国語の勉強のしかた
9 国語
10 ワンピースを作って
11 英語
12 数学・がむしゃらに問題にあたる
Ⓕ 楽しみ
1 テレビについて
2 テレビ（2）
3 西部劇
4 模型作り
5 花火
6 趣味
7 こづかい
8 自由な時間
G 読書
1 本を読まない
2 「コタンの口笛」を読んで
3 読書
Ⓗ 学級
1 学級
2 キャンプ（3）
3 キャンプ生活
4 キャンプの心構え
5 けんか
6 理解
7 クラスマッチ
8 学級を明るく
9 楽しいクラス
10 学級のみなさんに
11 グループ
12 新しいグループ
13 クラスの花
14 クラスの団結
Ⓘ 学校
1 夏休み（3）
2 夏休みは有効に

3 夏休みについて（2）
4 夏休みの計画（2）
5 夏休みを楽しく過ごそう
6 二学期
7 試験の日
8 計画
9 学校（2）
10 学校生活
11 不良化
12 集団生活
13 校舎内をきれいに
14 受験
15 試験とは
16 高志館
17 先生への希望
18 ぼくがみた先生
19 国実先生
20 先生方に対する礼儀
21 先生

22 学校の途中でうつくしいみんな
23
24 学校での私たち
25 学力テストに思う
26 学力テスト
27 JRC
28 注意される人間
29 うそをつく子
30 パン売場の整理
31 暴力
Ⓙ 社会
1 一秒間の大切さ
2 流行
3 夏の健康
4 コンタクトレンズに新種
5 ブーム
6 時計の針がすすむ

7 討議のしかた
8 被災者
9 科学
10 道路（2）
11 新聞を読んで
12 宣伝について
13 自衛隊
14 航空母艦
15 運動
16 町をきれいに
17 日本という国
18 人間と集団
19 働く人々
20 ガンブーム（2）
21 新聞
22 日本人の英語
23 現代
24 騒音
25 安全地帯
26 タクシー
27 成人の日
28 右側通行
29 プラスチック時代

30 交通事故	39 中学生の考え方	7 平和なくらし	⑤ 率直ですっきりしたもの
31 盗作		8 原水爆	⑥ 中学生らしいもの
32 ポーナスと景気	40 人生	Ⓛ 想像	⑦ 全体の内容を一言で表わしたもの
33 自分の国をのこそう	41 人生とは	1 宇宙	⑧ みんなの心に共通するものがあるもの
34 大人の社会をこう思う	42 人間	2 宇宙について	⑨ きばつなもの
35 偉人とは	Ⓚ 世界ノ死の灰	3 宇宙のはて	⑩ 胸うたれるようなもの　などである。
36 作る	2 核実験	4 海底	グループあるいは全体での話し合いには、題材表のほか、作文メモの具体例についてとりあげ、そのよしあしを話し合ったり、作文メモの形式や取材活動の全体についても話し合わせておく必要があるように思う。
37 人の心	3 アルジェリアの独立	5 未来	
38 昔の人の考え方	4 世界の平和	6 月旅行	
	5 ミサイル	7 夜空への夢	
	6 世界を結ぶテレビ		

2　話し合いについて

単元「討議」の学習において、学校全体の問題を話し合う前にグループでの話し合いをさせた。この時、六月の題材一覧表を使用して「良い題材とはどういうものか」というテーマを掲げた。これはグループで話し合うことに慣れさせることが主目的であったわけだが、作文題材表をとりあげてのはじめての話し合いにはかなり興味をもったように思う。良い題材の条件としてあがったことは、

① 興味をそそるようなもの
② 印象を強く与えるようなもの
③ 考えさせるようなもの
④ 作者の気持ちがよく表われているもの

実際に、話し合いの機会がなか〳〵とれぬが、学期別、日毎に設けて計画の中に組みいれていき、実施するようにしなければ流れて消え去ってしまうことが多いと思われる。

3　独話について

短い時間をとり、作文の題材として参考となるような話をするようにすることが必要であるように思う。自分の生活あるいは自己自身を深めていくような方向のもの、また意見や考えを発展させていくようなもの、観察、記録の方向にむかうものなどをとりあげ、事実や問題の形で提示していくようにする。

一学期の一回の試みとしては、新聞、雑誌の文章から、いくつかの題材を紹介した。例えば

① 女子学生亡国論について
② 人間はいつ奮起するか
③ テレビの人気番組
④ 夏の犯罪をなくそう

⑤ 通知表のみかた
⑥ 川をきれいに
⑦ 美人コンテスト
⑧ 夏の服装
⑨ 水の事故を防ごう
⑩ リューヴェン公妃
⑪ ペンギン物語
⑫ 昭和五十年
⑬ 笑い
⑭ 夏休みの過ごしかた
⑮ 刃物を完全になくそう

などである。朝日新聞の「季節風」欄にとりあげられた「女子学生亡国論」を紹介すると女子のあるものはいきり立つ。これに対して反論を書くことをすすめる。朝日ジャーナルに紹介してあった死期に近づいたペンギンが群からはなれて天にむかって叫び湖底に自ら身を沈めるという話をすると目を輝かせる生徒がいる。この話を物語風に書いたらとすすめたりする。また男女の年令別推計人口についての発表によると昭和五十年ごろから適令期の男性が女性よりも百十万も多くなるということを紹介する。昭和五十年頃の自分は社会は、世界はなどと想像を豊かにめぐらせて文章を書いてみるのもおもしろいとすすめたりする。

このように、わずかな時間を、しかも計画的にとらえて取材のための短い話を実施していくばあい、まず教師自身がたえず取材の目を生き〳〵と輝やかしていなければならないと思う。

平素から材料をあつめておくと、取材を教師自身も積み重ねて、生徒の取材の目を広げ深めることができるわけである。

4　掲示について

取材活動をすすめるための掲示板の活用について、実際にはとりあげていないが、生徒の生活の場である教室において、たえず目にふれることのできる掲示板を利用することが必要である。

取材意識をきかたてていくために、新聞の切り抜きをはったり、取材メモの実例を展示したりする。「国語教室掲示板」をぜひ設定し活用していきたいものと思う。

その他、個別指導、取材用紙のくふう、取材指導計画および評価についても、考えていかなくてはならないだいじな問題がある。

Ⅴ　おわりに

三年一学期の取材活動の実際のありのまゝをとりあげ、反省としてあげたことをこれからの問題として実践のうえでくふうし解決していかなければならないことである。

取材活動の中心である「作文メモ」の扱いについては、なおくふうが必要であるが、「作文メモ」の問題点のひとつをあげてむすびとしたい。

「作文メモ」の項目のうち「形」、とくに「構想」のところが書きにくいと訴えるものが多い。このことからも、「作文メモ」は何のために書き、どのように書くのか、どのように利用するのかについて指導が不十分であったことが反省される。不徹底なままでのこの作業は苦痛を生むだけである。全体的にも、また個別的にも、取材活動の意義やその方法を十分に理解させておくことが必要であることを痛感させられるのである。（昭和37年11月4日稿）

（広島市国泰寺中学校教諭）